View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tottori University Research Result Repository

「対象理解」を学習目標とした模擬患者参加型教育の効果

[1] 鳥取大学医学部保健学科　成人・老人看護学講座
[2] 鳥取大学医学部医学科　社会医学講座　医学教育学分野
[3] 鳥取大学医学部医学教育総合センター

谷村千華[1]，西尾育子[1]，野口佳美[1]，大庭桂子[1]，高橋洋一[2,3]，三好雅之[2,3]

The Educational Effect of Nursing Practice with Simulated Patients for the Purpose of Understanding Patients

Chika TANIMURA[1], Ikuko NISHIO[1], Yoshimi NOGUCHI[1], Keiko OBA[1], Yoichi TAKAHASHI[2,3], Masayuki MIYOSHI[2,3]

[1] *Department of Adult & Elderly Nursing, School of Health Science, Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*
[2] *Division of Medical Education, Department of Social Medicine, School of Medicine, Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago, 683-8503, Japan*
[3] *Undergraduate Education Unit, General Center for Medical Education, Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago, 683-8503, Japan*

ABSTRACT

The purpose of this study is to identify educational effects of nursing practice with simulated patients aiming to understanding patients. Data were collected by self-administered questionnaire including the Self-Efficacy Scale and Learning Motivation Scale for 25 third-year university nursing students at the point of pre- and post-intervention.

The analysis was based on descriptive statistics, qualitative analysis and the Wilcoxon signed rank-sum test to compare self-efficacy and learning motivation pre- and post-intervention. The learning motivation score before intervention was 179.5 ± 41.2 points and 191.7 ± 44.8 points after intervention ($p = 0.025$). The self-efficacy score before intervention was 81.3 ± 11.4 points and 87.5 ± 13.5 points after pre-clinical training ($p = 0.003$). The students' self-efficacy and learning motivation were increased by practice with simulated patients. In addition, the practice with simulated patients gave students various effects such as the "Sense of Tension" "Reality" "Reflection". These results suggest that nursing practice with simulated patients aiming to understanding patients would be useful in the basic nursing education.

(Accepted on August 3, 2016)

Key words : simulated patients, self-efficacy, learning motivation

はじめに

近年，医療の高度化や疾病構造，生活過程の多様化に伴い，看護職者には，対象を理解するためのコミュニケーション能力を含む看護実践能力の向上が求められている．知識や理論を看護実践に活用できる看護職者を育成するためには，看護実践の場面を教材化し，その教材世界の中で学習者が自ら考え，活動するように授業を設計することが重要である．

文部科学省は大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会において,「看護学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」[1]を提示している．その中で，看護職者には，高度なコミュニケーション能力が求められ,「自己を分析し自己理解できる」「看護の対象となる人々と適切な援助的コミュニケーションをとることができる」等の学習成果が示されている．すなわち，看護の過程が成立するためには，対象との援助的関係・信頼関係の形成が重要であり，看護学生（以下，学生）にはこれらの能力の向上が求められている．しかし，現代の学生は多様な世代と関わる経験が乏しく，社会性の低下や人との関係性の希薄さが指摘されている[2]．そのような学生にとって，緊張や不安を伴う臨床現場で初対面の患者と関わり，対象理解や援助的関係を深めていくことは容易ではない．

このような背景の中，看護基礎教育では，模擬患者（Simulated Patient：以下，SPとする）が参画する教育方法が導入されている．SP参加型教育の学びとして，実際に近い看護場面でのリアリティのある体験[3,4]，対象を理解するためのコミュニケーションの在り方[3,5]，患者の反応を観ながら個別性に応じた看護活動を考慮でき，実習時に受け持ち患者への看護を考える際に役立つといったことが挙げられている[4]．また，原島ら[6]は,SPを活用したシミュレーション教育において,「患者や実習のイメージ化」「学習意欲の高まり」などの学習効果を明らかにしている．学習意欲に関しては，近年では大学教育全体の課題として，学生の目的意識の希薄化，学習意欲の低下等が指摘されており，看護基礎教育においても，看護学生の学習意欲を高めていくことは重要な課題である．そのような社会的ニーズを踏まえ,SP参加型教育は,「専門知識を身につける必要性を実感する」「実習への意欲や自己成長につなげる」こと[7]，実習前の事前学習への動機づけや演習が次の実習の課題・目標の明確化の第一歩になること[3]などの成果をもたらし，学生の学習意欲の向上に寄与している．

また，臨地実習前の学生の特徴として，知識，技術，看護過程の展開，患者とのコミュニケーションに関する不安，人間関係に関する不安などを抱いていることが報告されている[8,9]．Bandura[10]は，自己効力感を低く認知している者は不安レベルが高いことを指摘し，自己効力感が低い人が困難な状況に直面すると，パフォーマンスの質が悪化していくことが示されている[11]．すなわち，臨地実習の場における学生の“自信がない状態”は，緊張や不安を強め，学習を阻害し生産性を低下させる要因となることが予測される．臨地実習前の教育方法として，学生の自己効力感の向上を促進する教育支援が必要であると考える．

以上のような背景から，本学の慢性看護学領域では，2015年に学生の自己効力感および学習意欲の向上の促進を目的とし，慢性疾患をもつ患者の対象理解を学習目標とした臨床場面を模擬的に再現したSP参加型教育を導入した．模擬患者（Simulated Patient）とは,「患者の持つあらゆる特徴を物理的に可能な限りを尽くして完全に模倣するよう特訓を受けた健康人」とし，生きた教材として患者役を演じる人のことである[12]．本学では平成22年度に「米子模擬患者の会（会員数22名，平成28年7月現在）」が設立され，SPの学内養成を開始している．SPの養成においては，役作りやフィードバックの向上を目的とするSPスキルアップセミナーや演習・実習前の事前説明会や練習の機会を設けることで，より効果的なSP参加型教育の実施を目指している．また，看護基礎教育における対象理解とは,「対象の身体的・心理的・社会的な側面，生活者としての統合的な解釈により対象の全体像を捉える学生と対象との相互作用と思考のプロセス」であり，帰結として対象への個別的な看護援助や関係性の発展をもたらす[13]．

本研究の目的は，3年次看護学生を対象に,「対象理解」を学習目標としたSP参加型教育を実施し，その有効性について検討することである．

対象および方法

1. 対象

「成人看護学演習（慢性）」（必修科目）を履修

したA大学医学部保健学科看護学専攻3年次生80名のうち，本研究の趣旨を理解し同意の得られた者を対象とした．

2.「成人看護学演習（慢性）」におけるSP参加型教育の概要

「成人看護学演習（慢性）」は慢性看護学領域における3年次前期の科目である．学生は，既に2年次前期・後期を通して，慢性看護学の基礎となる理論，看護の方法，慢性疾患に関する病態や治療に関する基礎知識を習得している．この授業は全8回であり，講義，グループディスカッション，ロールプレイ（SP参加型，学生間），振り返り・フィードバック・まとめ，小テストで構成している．

1）科目の学習到達目標

この科目では，慢性疾患を持つ成人の健康課題についての判断，健康ニーズに応じた看護援助の計画，実施，評価について，慢性疾患をもつ患者の事例（糖尿病患者）を通して学ぶ．科目の学習到達目標は，「1．健康障害（慢性）をもつ人を身体的，心理的，社会的側面から全体像を理解（対象の理解）し，計画的・意図的な看護実践を導くために必要な，看護モデル・枠組みを理解し説明することができる．」「2．健康障害（慢性）をもつ人を身体的，心理的，社会的な側面から患者の全体像を捉え，計画的・意図的に看護援助を行うことができる．」である．

2）SP参加型教育の概要

第1回から8回までの授業の流れは，図1に示すとおりである．

第1回目の授業で，事例紹介と事例検討の方法についての説明を行った．事例は糖尿病を持つ患者（A氏）とし，学生には，事前に年齢，性別，現病歴，既往歴，治療経過，医師の指示，症状，現在の状態，検査データ，生活過程の特徴，患者の心理的状態等の情報を提供した．この事例の内容を

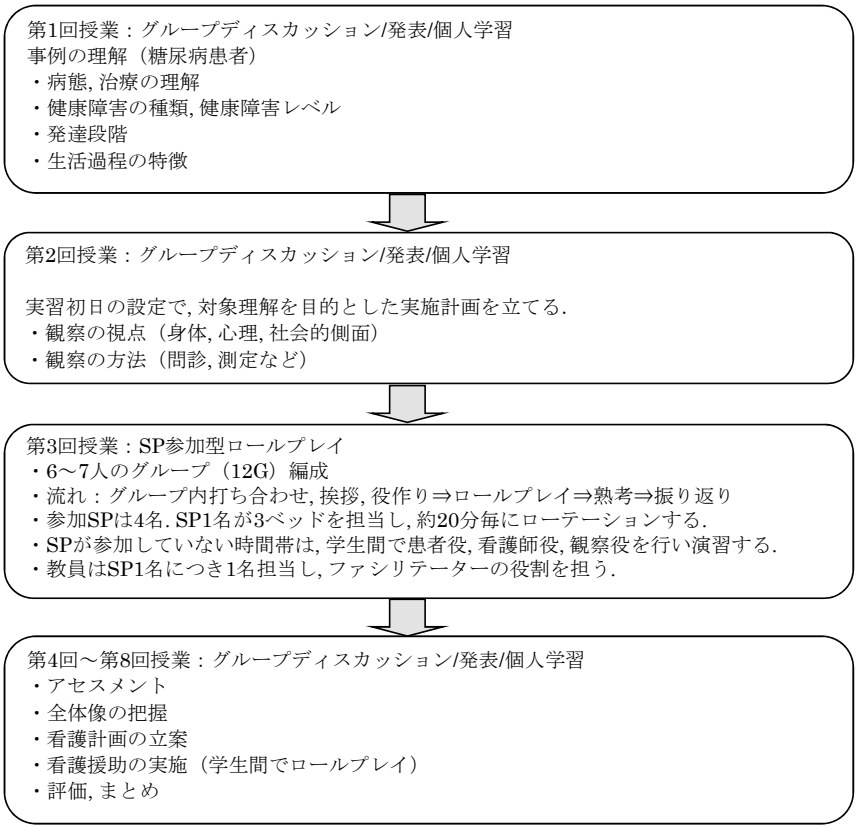

図1　SP参加型教育の概要

第1回から8回までの授業の流れである．第3回目の授業にSP参加型ロールプレイ演習を取り入れている．

表1　実践場面の課題と学習目標

課題：
場面設定：内科病棟/実習初日/学生は午前中にA氏に挨拶し，午後14時に再び訪室した．Aさんは，入院2日目です．あなたはAさんの担当学生です．これからAさんにお会いします．これから，Aさんの個別性に応じた適切な看護を実践していくために，あなたは，Aさんに対して看護的な関心を持ち，まずAさんを知りたいと思って行動します．

学習目標：「対象（A氏）の理解」

下位目標・行動の指針：
1．患者の反応を観察しながらコミュニケーションをとることができる
2．信頼される人間関係づくりを目指す援助的コミュニケーションをとることができる
3．観察（聞くこと，観ること，触れること，測定することなど）の目的を持ち，意図的に関わることができる
4．対象理解のプロセスを通して自己の思考，行動，コミュニケーションの傾向に気づく

図2　SP参加型ロールプレイの様子
6〜7人のグループ編成であり，教員1名がファシリテーター役割をとる．看護師役1名が演示し，残りの学生は観察役を行う．演示後は，患者（SP）→看護師役→観察役の順で振り返りを行う．

手がかりに，学生は，糖尿病に関する病態や治療の理解，A氏の健康障害の種類と健康障害レベル，発達段階，生活過程の特徴からA氏の個別性の理解を深める学習を行う．さらに，学生のA氏への関心および推論の拡がり，疾患や治療に関する知識が不十分であることに気づき，学習への動機づけを高めることも授業のねらいとした．

第2回目の授業では，A氏について，どのような事象に関心を持ち，どのような側面についてもっと知りたいと思うのか，それはなぜか，という視点でグループディスカッションを行った．さらに学習課題として，学生は，A氏の身体的，心理的，社会的側面における観察の視点やどのような方法を用いて観察を行うべきかを思考・計画立案し，第3回目の「SP参加型ロールプレイ」に臨んだ．

「SP参加型ロールプレイ」当日の実践場面の課題と学習目標を表1に示す．「SP参加型ロールプレイ」における学習目標は，「対象の理解」であるが，「患者を知るために意図的にコミュニケーションを図りつつ，患者の反応を観察しながら，適切に対応し，援助的コミュニケーションを通して信頼される人間関係形成を構築することの大切さに気づくこと」をねらいとしている．

SPへの事前オリエンテーションでは，学生の学習目標，スケジュール，事例紹介・演技のポイント，予測される学生の行動・言動，予測される学生の身体的接触，振り返りのポイントを説明した．重要な点として，医学教育で活用されている客観的臨床能力試験における標準模擬患者（Standardized Patient）とは異なり，患者像をマ

ニュアル化しないこと，シナリオは厳密に準備しないこと，学習者である学生との相互作用の中で生じたその時々の思いや感情に忠実に学生に応じることについて強調して説明した．

3）SP参加型ロールプレイの方法

学生は，1ベッド6～7人のグループ（全12グループ）に分かれ，さらにグループの中で2組に分かれ，3人～4人1組のユニットで演習を行う．学生はローテーションで看護師役，観察役，患者役を体験する．90分の演習で，「グループ内打ち合わせ，挨拶」2分，「ロールプレイ」10分，「熟考時間」30秒，「振り返り」9分を計3回繰り返して実施した．参加SPは4名であり，SP1名が3ベッドを担当し約20分毎にローテーションをした．SP参加時は，看護師役以外の学生は観察役を行った（図2）．

3．調査時期，調査方法

調査期間は，平成27年4月～6月であり，質問紙調査の時期は，第1回授業前と第8回授業終了後の2時点とした．調査は無記名の自己記入式質問紙による調査とした．

4．調査内容

1）SP参加型教育に対する満足感

授業に対する満足感については，授業終了後のみ，回答を求め，「1．満足していない」「2．あまり満足していない」「3．やや満足している」「4．まあまあ満足している」「5．非常に満足している」の5件法で回答を求めた．

2）看護実践活動に関する自己効力感

自己効力感の評価は，水木ら[14]が開発した「看護実践活動に対する自己効力感尺度」4因子24項目を用いて学習支援参加の前後に調査した．この尺度は，「人間関係形成技術」，「基本的看護技術」，「アセスメント技術」，「ストレス耐性」の4因子で構成され，信頼性および妥当性が得られている．回答は，「1．できないと思う」から「5．できると思う」の5件法で，値が高くなるほど自己効力感が高いことを示す．

3）学習意欲

学習意欲については，小竹ら[15]が開発した看護学生用学習意欲尺度を用いた．学習意欲尺度は第1因子「学習に対する自己の現状理解」7項目，第2因子「自律的な学習行動」6項目，第3因子「看護学に対する『よくできる感』」6項目，第4因子「友との相互作用から生じる自信」3項目の4因子22項目で構成されている．なお，回答は，「1．ぜったいちがう」から「4．いつもそうだ」の4件法で，得点化は，素点を0-100スケールに変換する．値が高くなるほど，学習意欲が高いことを示す．

4）SP参加型教育に関する学び・感想

8回の授業終了時のみ，授業に関する学び・感想を自由に記載してもらった．

5．データ分析

全ての変数に対して記述統計を行い，得点の前後比較には，Wilcoxonの符号付順位検定を行った．授業前後の変化の差が意味のあるものかを検討するために，検定統計量Zと被験者数を用いて計算する効果量の指標rを算出した．統計ソフトはIBM SPSS Statistics 21を使用し，有意水準は5%とした．自由記述は言葉の意味内容を解釈しコード化を行った．

6．倫理的配慮

学生には，研究協力の説明書，質問紙を配布し，研究者が口頭で調査を依頼し，自己記入式質問紙に無記名で記入してもらい，返信をもって同意とみなした．説明内容は，研究への参加は自由であること，質問紙に記入している途中でも参加の中止が可能であること，不同意でも同意撤回でも学習者には不利益が生じないこと，成績には一切関係しないこと，プライバシーの確保ならびに匿名性の確保，質問紙の内容は本研究の目的以外には使用しないこと，質問紙は本研究終了後に速やかに破棄すること，データの管理・処理については外部に漏れることのないように細心の注意を払うこと，である．回収にあたっては，回収箱を講義室の出口に設置し，プライバシーが保てるように配慮した．本研究は，鳥取大学医学部倫理審査委員会の審査を受け，承認後（承認番号：2550）に実施した．

結　　果

1．対象者の概要

授業前，終了時共に質問紙の提出があり（回収率：32.5%），欠損値のない分析対象は25名（男性2名，女性23名）であった．

2．SP参加型教育に対する満足感

「非常に満足している」「まあまあ満足している」と回答している者は16名（74%），「やや満足している」5名（20%），「あまり満足していない」4名（16%），「満足していない」0名であった．「あまり満足していない」「やや満足」に回答した者

表2　学習意欲および看護実践活動に関する自己効力感の変化

		平均	標準偏差	p値	効果量r
前	学習意欲得点	179.5	41.2	.025*	0.45
後	学習意欲得点	191.7	44.8		
前	学習に対する自己の現状理解	58.9	15.1	.940	0.02
後	学習に対する自己の現状理解	58.1	14.9		
前	自律的な学習行動	54.7	13.8	.173	0.27
後	自律的な学習行動	58.4	14.1		
前	看護学に対する「よくできる感」	23.8	14.3	.384	0.18
後	看護学に対する「よくできる感」	22.7	15.4		
前	友との相互作用から生じる自信	42.2	20.8	.005**	0.56
後	友との相互作用から生じる自信	52.4	19.4		
前	自己効力感得点	81.3	11.4	.003**	0.59
後	自己効力感得点	87.5	13.5		
前	人間関係形成技術	35.1	5.1	.001**	0.69
後	人間関係形成技術	38.1	5.1		
前	基本的看護技術	15.7	2.9	.003**	0.59
後	基本的看護技術	17.4	3.3		
前	アセスメント技術	17.4	2.6	.011*	0.51
後	アセスメント技術	18.9	3.0		
前	ストレス耐性	13.1	3.2	.808	0.05
後	ストレス耐性	13.0	4.2		

**：$p<0.01$　*：$p<0.05$（Wilcoxonの符号付順位検定）

の自由記述では「実際にSPさんを対象に演習を行うことができなかった.」「私たちがSPさんの演習に見合う学習の準備ができていなかった.」「自信がなく目標到達ができなかった.」「知識が足りない.」といった記載がみられた.

3. 学習意欲

表2に学習意欲の変化を示した．学習意欲総合得点は，授業前は平均179.5点（標準偏差41.2）であったが，終了後では平均191.7点（標準偏差44.8）と高くなり，有意差がみられた（$p = 0.025$）．下位因子では,「友との相互作用から生じる自信」のみ有意差がみられた（$p = 0.005$）.

4. 看護実践活動に関する自己効力感

表2に看護実践活動に対する自己効力感の変化を示した．自己効力感総合得点は，授業前は平均81.3点（標準偏差11.4）であったが，終了後では平均87.5点（標準偏差13.5）と高くなり，有意差がみられた（$p=0.003$）．下位因子では,「ストレス耐性」以外の得点で有意差がみられた.

5. SP参加型教育に関する学び・感想

自由記述内容は，学び，反省点・課題，メリット，デメリットに分類された（表3）．表内の数値はコード数である.

考　察

本研究は,「対象の理解」を学習目標としたSP参加型教育を実施し，その有効性について検討した.

SP参加型教育に対して，学生の約7割が満足感を感じていた．自由記述の結果においても,「緊張感を持って取り組める」「臨場感がある」「実際の患者に近い感覚」など学生は多様なメリットを感じており，SP参加型教育は臨地実習に向けてのモチベーションやイメージ化につながることが示さ

表3　SP参加型教育に関する自由記述の結果

学び		反省点・課題		学生が感じるメリット		学生が感じるデメリット	
言葉遣い・話し方	3	知識が足りない	5	緊張感を持って取り組める	10	全員が体験できない	1
患者への態度・姿勢のあり方	2	自己の課題・改善点の発見	2	臨場感がある	5		
自分の傾向に気づく	2	SPの準備に見合う予習ができていない	2	学生同士よりもリアリティがある	4		
患者の反応をみることの大切さ	2	コミュニケーション力の不足	1	実際の患者に近い感覚	4		
共感・傾聴の大切さ	2			実習に近い感覚	3		
看護実践力の向上	1			実践的	3		
相手にわかりやすい伝え方	1			患者からのフィードバックを得ることができる	3		
患者の気持ちに寄り添うことの大切さ	1			普段聞くことができない患者の思いを知る機会	2		
人間関係の構築の大切さ	1			臨床現場・実習のイメージづけ	1		
				患者役のイメージがひろがる	1		
				刺激的	1		

れた．加悦[16]は，学生模擬患者と比較し養成SPの方が緊張感とリアリティにおいて有意に高かったことを報告している．また，学生が演習で感じる成果として，SPとの共同学習は臨床の場をリアルに感じることができ，真剣な学習ができる，講義だけでは得られない体験的学習ができることが報告されており[3]，これらの成果は，本研究結果と類似していた．このような成果の実感が学生の満足感につながったといえる．一方で,「全員が体験できない」とデメリットを感じていた者や反省点を挙げていた者は満足感が低いことが示された．本田ら[17]は，SP参加型教育の課題として，事前の綿密な準備，費用や時間，学生数の問題などから学びの質が看護者役体験の有無に左右される，などを挙げているように，授業時間における学生全員のSP参加型ロールプレイ時間の確保には限界がある．しかし，本研究では学習意欲の「友との相互作用から生じる自信」が有意に向上しており，SPとの直接的な関わりを体験できなかった学生においても，観察役としての客観的評価やSPによるフィードバックの場をグループ討議によって共有することを通してダイナミックな学び合いの機会になったことが推察される．学生が観察役，患者役を通しても魅力的，効果的な学びが促進され，学生が満足感を得ることができる教育的支援を提供する必要がある．

本研究では，学習や実践活動の促進に必要な要件である自己効力感の変化が捉えられ，SP参加型教育は学生の看護実践活動に関する自信の向上に寄与する可能性を示唆した．下位因子においては，「ストレス耐性」のみ得点に有意差がみられなかったが，むしろ臨場感や緊張感をもたらすSP参加型教育は，学生に生産性を高める適度な緊張感やストレスを提供することができると考えられる．また，効果量の値から，「人間関係形成技術」「基本看護技術」「アセスメント技術」に関する自己効力感の変化は，教育学的な意義を持つものと判断できた．中でも，SP参加型教育の効果は，その効果量の大きさから「人間関係形成技術」に関する自己効力感に最も強い影響を与えることが示唆された．吉新[18]は，看護学生のコミュニケーションに関する教育方法の実態について，多様な教育方法の効果についてまとめ，SP参加型教育の特徴として，「患者の心情が理解できる」「自己洞察ができる」を挙げている．臨地実習における実際の患者は学生に対して真の思いを表現することが少ない場合もあるが，SP参加型教育の場合は，演じたSPから即時的で率直なフィードバックを得ることができるという利点がある．学生は，フィードバックを通して，自己のコミュニケーションや思考，行動の傾向に気づき，SPのその時の気持ちを直接知る体験ができたといえる．また，竹田ら[3]は，学生がSP参加型教育を通して最も印象に残ったこととして，「患者理解の手がかり」「傾聴の重要性」「患者に沿うこと」「ことばと間の大切さ」「看護者としての態度の基本」など人間関係形成に必要な姿勢を示している．以上のようなSPとの相互作用を通じた自己と他者に向き合う体験が

人間関係形成技術に関する自己効力感を高めることにつながったと推察される．

本研究では，SP参加型教育前後で学生の学習意欲が向上することが示唆された．自由記述の結果からも，「知識が足りない」「SPの思いに見合う準備の不足」「自己の課題・改善点の発見」などが抽出され，SP参加型教育は学生の自己内省を促進させ，責任感の芽生えや更なる学習への動機づけに寄与したものといえよう．ケラー[19]は，学習意欲を高める要因に，注意（おもしろそう），関連性（やりがいありそう），自信（やればできそう），満足感（やってよかった）に整理し，学習意欲には，内発的・外発的動機づけという2つの要素が複雑に絡み合っていると述べている．SP参加型ロールプレイが学生同士や教員が演じるロールプレイと異なる点は，訓練されたSPが患者役をすることによる緊張感とリアリティである．それによって，学生は臨床との関連性（やりがいありそう）を実感し，より真剣に患者に向き合おうとする姿勢や患者への援助に対する責任感が芽生え，学習意欲の向上につながったものと考えられる．

本研究の限界として，回収率が低く，選択バイアスとして，学習意欲の高い集団に偏っている可能性が考えられる．また，実際にSPを対象に看護師役としてロールプレイができた学生は少なく，SPとのロールプレイを体験した学生と学生同士でのロールプレイのみを体験した学生と学びの構造に違いが生じた可能性があるかどうかは確認できていない．今後，SP参加型教育をより効果的に展開していくためには，学習者集団全体に対する有効性について検討し，その上で，事例の精選，実施時間を含めた内容の検討を行う必要がある．

結　語

模擬患者参加型教育は，学習者に満足感，自己効力感の向上，学習意欲の向上をもたらす可能性が示唆された．

本研究に快くご承諾いただきました学生および模擬患者の皆様に心からお礼申し上げます．本研究は，第48回日本医学教育学会大会で発表された演題に加筆・修正を加えたものである．

文　献

1）大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf

2）柳川育子，矢吹明子．現代看護学生の生活及び気質の特徴第2報（次元別解析）―1987年，2000年及び2009年の比較―．京都市立看護短期大学紀要 2011; **36**: 61-68.

3）竹田恵子，太湯好子，谷坂佳苗長．模擬患者（SP）を導入した看護面接教育の取り組みとその課題．川崎医療福祉学会誌 2004; **14**（1）: 27-40.

4）城戸滋里，猪又克子，本戸史子，岡崎寿美子．看護基礎技術演習への模擬患者（SP）導入に関する学生の評価．北里看護学会誌 2006; **8**（1）: 38-47.

5）鈴木玲子，高橋博美，常盤文枝．コミュニケーション学習にSP（Simulated Patient）を取り入れた教育技法の開発．埼玉県立大学紀要 2002; **4**: 19-26.

6）原島利恵，渡辺美奈子，石鍋圭子．看護における模擬患者を活用したシミュレーション教育に関する文献検討．茨城キリスト教大学看護学部紀要 2012; **4**（1）: 47-56.

7）相原優子，神里みどり，佐伯香織．模擬患者を活用した看護アセスメント演習の評価．日本看護医療学会 2007; **9**（1），27-38.

8）長家智子．学生の臨床実習へ対する認識と不安．九州大学医療短期大学紀要　1989; **16**: 43-53.

9）岡部聡子，佐伯真理，小林伸子，森下節子，村山正子．看護学生の臨床実習前の不安について．看護教育 1991; **32**: 668-673.

10）Bandura A. Self-efficacy conception of anxiety. Anxiety Research 1988; **1**: 77-98.

11）Wood R, Bandura A. Social cognitive theory of organizational management. Academy of Management Review 1989; **14**: 361-384.

12）植村研一編：医学教育マニュアル5　シミュレーションの応用．第1版，篠原出版．1984, p.34.

13）小林秋恵，堀美紀子，三浦浩美，大浦まり子．看護基礎教育における「対象理解」概念の明

確化．日本看護学会論文集：看護教育 2010; **40**: 200-202.

14）水木暢子，木村千代子，佐藤純子．臨地実習における看護学生の看護実践活動に対する自己効力感の検討．秋田看護福祉大学地域総合研究所研究所報 2008; **3**: 15-22.

15）小竹久実子，羽場香織．看護学生用学習意欲尺度の開発．応用心理学研究2014; **39**（3）: 197-205.

16）加悦美恵，安部等思，藤野浩，森本紀巳子，神代龍吉，犬塚裕樹，上野隆登．医学科・看護学科共同でのSP養成の現状解析と今後の方向性　Advanced OSCEにおける学生SPとの対比．久留米医学会雑誌 2008; **71**（5・6）: 199-207.

17）本田多美枝，上村朋子．看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察－教育の特徴および効果，課題に着目して－．日本赤十字九州国際看護大学IRR 2009; **7**: 67-77.

18）吉新典子．看護学生のコミュニケーションの問題に対する看護教育方法の実態－2005年から2008年の文献を対象として－．神奈川県立保健福祉大学教育センター看護教育研究集録 2009; **3**: 93-100.

19）Keller JM.（鈴木克明監訳）学習意欲をデザインする　ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン．京都，北大路書房．2012.